

油絵

教授

- 1976 東京藝術大学 大橋賞
 1977 東京藝術大学 大学院修了
 1981 第 55 回国画会 新人賞
 第 15 回文化庁主催現代美術選抜展
 1984 大橋賞受賞作家展 (高島屋)
 1989 第 32 回安井賞展
 1996 広島芸術学会 制作と思考 第 1 回展「10 年の軌跡」
 1997 Contemporary Japanese Art Exhibition National
 Museum in Cracow Poland 出品
 1999 海外派遣研修 (イタリア・国立ローマ・アカデミア美術学校)
 2000 広島芸術学会 制作と思考 第 3 回展「境界と交流」
 2001 個展：現代日本美術家集団企画 (東京銀座・ギャラリー樹)
 2002 「広島の絵画 110 人展」(中国新聞社)
 2003 広島芸術学会 制作と思考 第 4 回展「眼と素材」
 広島市立大学：平成 15 年度指定研究
 「表象都市 metamorphosis 広島 - 芸術実験展示プロジェクト 2003-」
 2004 広島芸術学会 制作と思考 第 5 回展「構想から完成へ」
 2006 広島芸術学会 制作と思考〈距離〉創立 20 周年記念芸術展示
 現在 国画会会員 広島芸術学会委員
 1994 年 4 月着任



《Landscape VII》

2006

H2000 × W1700mm

画面制作と俯瞰角の関係性の考察

本来、絵画というものを指して、たとえば、物理的なサイズの事例をあげるなら、指先に乗るような小さな豆本の図版のようなものから最近発見された岡本太郎作「明日への神話」などのような何十メートルという長大な壁画まで平面上に描かれたもの、あるいは解釈を拡げて立体やレリーフ状のものに描かれたものまでも指して絵画と呼ばれる範疇で理解されている。ところで、油絵といえどどちらかというあまり大きくもないキャンバスで居室の空間に収められるサイズの絵画、いわば日常的に当て嵌められた生活様式の中で展示されている。油絵は、いささか限定した趣の用途で扱われ、それが一般的な社会通念となっている。

絵画の西洋美術史に表れる大型の作品の役目は、公共の場におけるメッセージ性の意味において、日常的にその機能を果たしてきた。ルネッサンス・バロック期の大空間形式の建物内部では壁画や大型油絵作品は、「離れた距離」で見ると物理的問題と画題に臨場感と説得性を与える、と云った問題解決に透視図法（遠近法）の構想を持ち込んだ。ところが、大画面制作では一点透視や二点透視の技法に限界があることに気がついた画家たちによって様々な視形式が編み出されることとなったのは歴史的に周知の事である。

もともと、ルネッサンス期以前の壁画では観念的で物語的な表象である図像形式の手法によってえがかれていた。ルネッサンス期以降、画面が大型で巨大化したことと、一枚の画面の中に時間・空間を設定するにあたって位相の異なる状況なども纏めて表すようになった多視点の大型で巨大な絵画も実は、原理的に観念的で物語的であるという機能を同様に内包しているものであった。

研究課題として大画面制作と俯瞰角の関係性の考察では、平成 13 年より平成 18 年までシリーズ制作を行い、大画面制作における観念的で物語的な構成に対して、単一で統一的な観点から客観視された風景画を試みた。俯瞰によって景色を視覚的に一手に、ひとつかみに捉えた風景画は、歴史的に少ない。